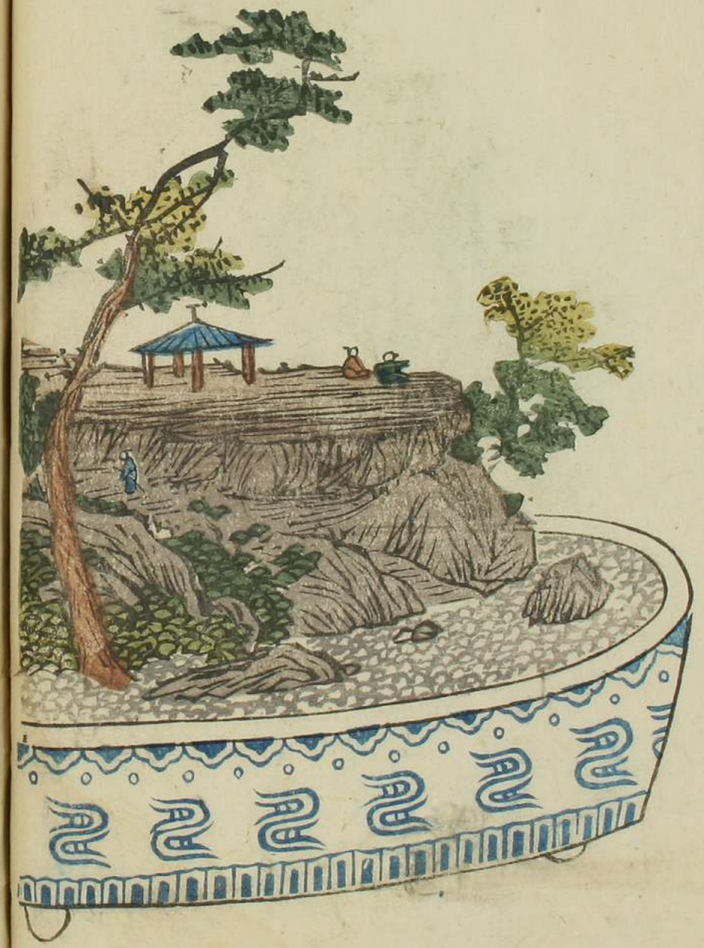
古景盤圖式

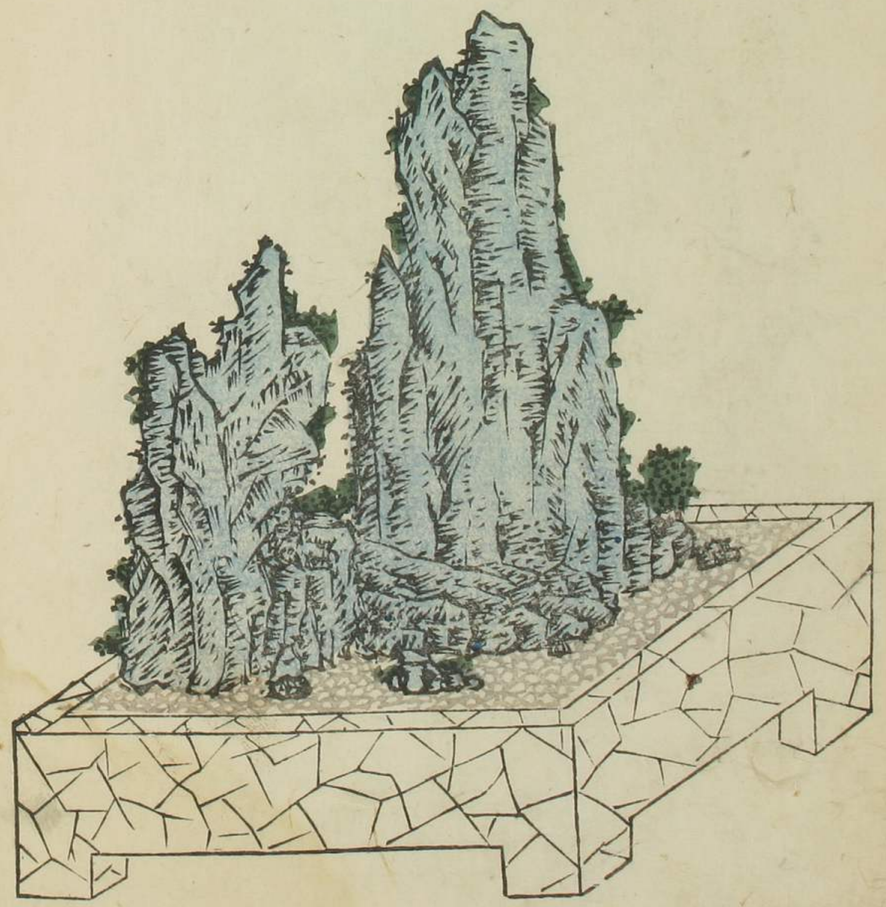
ヲ9
610
2

門ヲ引
流
巻

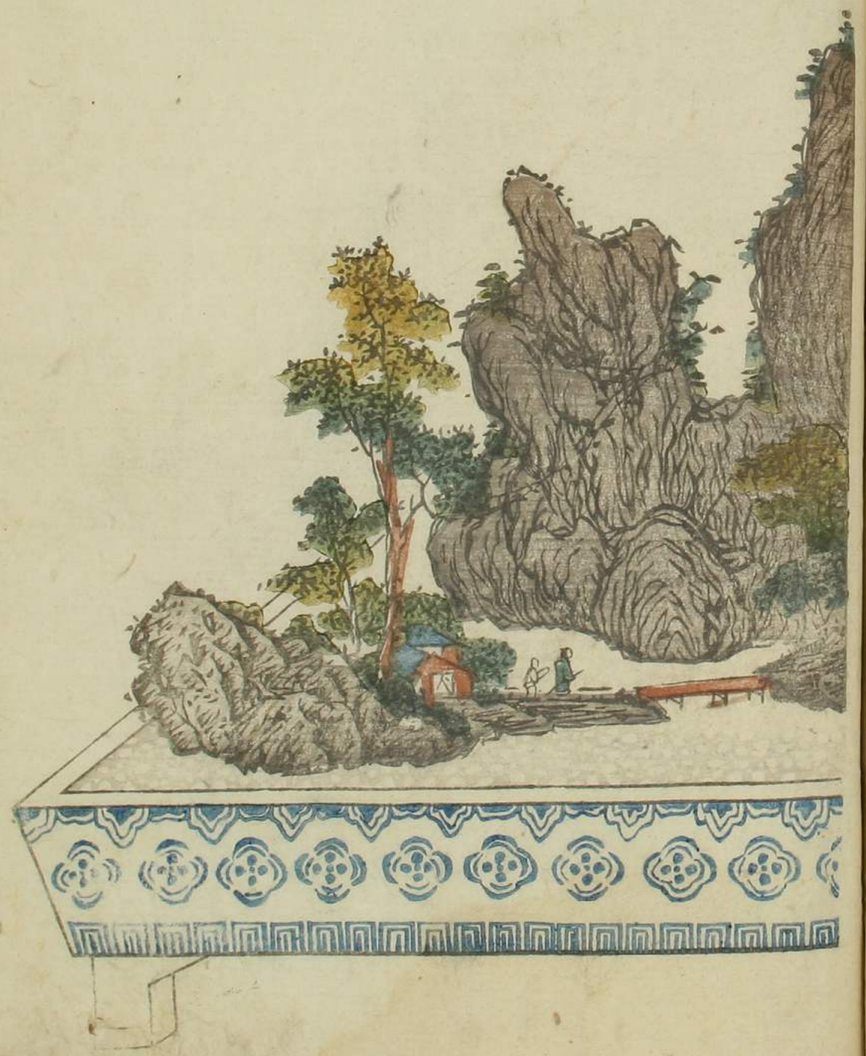


松韻雜彈瑟
泉流供洗毫

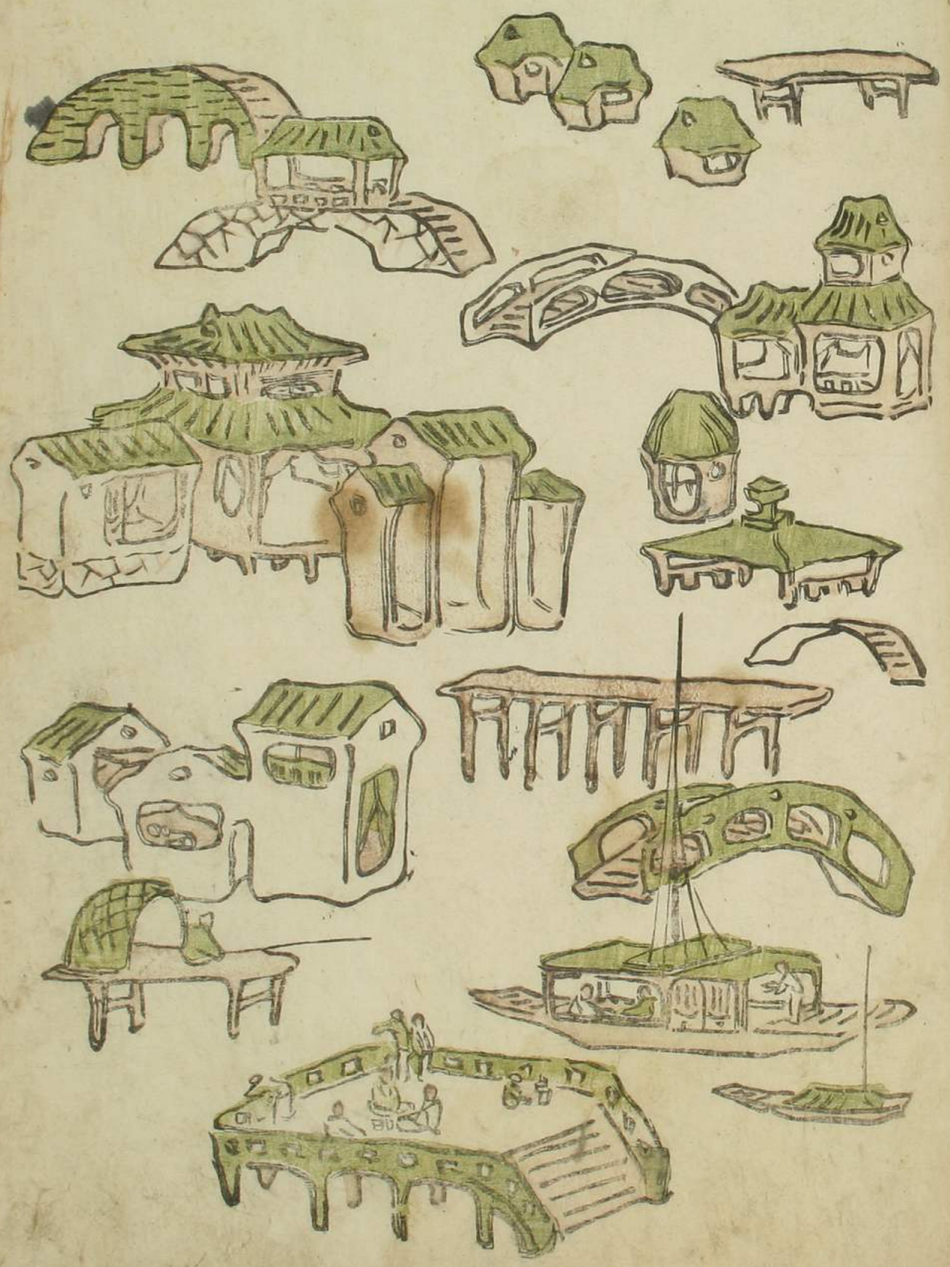
又人未寺拈得七十二首書



苔若藤重ハ
たゝのしゝおゝき
岩ひゝの形
百尚堂



世をいとふ人のこゝろ
のどかさか乃
山ハ遊ぶもあはれ
乃孔 正澄



右図ハ所のごく盤中に土を畫。石樹を按排して。
假山をなし。是球漢名あり占景盤。占ハ章豔切。造佔固有也
景を為ハ也ふ。或ハ縮景盤。たゞちに景色を盤中へうつすともいへり。
和名未詳。本邦中古盆亀といへるもこれなり。
或ハ銅盤磁盤の形をもつて池を造り。水を貯へ
なせしものなり。其趣たゞへ。扨此景盤培養をもつて
かゝる固小盤中ふこらゆる所ろまゝ四時の運行風寒
暑湿よりこゝろをもちひざまゝ。最損じ易し。
水を濺ぐを。初復より以後。八月まゝ。旦暮に二度で

樹葉を除く。藁等ふ〳〵河水を打けよく〳〵土あ〳〵
せ乾し。預くに兼る雨水は用意して濺ぎうけて
よし。樹根ふ。土籠ぐの口あるものに〳〵濺だかくべし。
〳〵樹葉ふ水かからば。よく〳〵拂除べし。風珠よく
乾けるものなれば風ある時ハ。いかやうにも水を濺ぐべし。
雨水ハ連日とつゞけ厭ふてとなし。井水ハ多く金氣
あるものなれば。最是を忌べし。日ハ〳〵ばかりもうつし
かゝぐ。夜ハ露をうけ。星をいゝぐき。風透よき所を撰べ

景盤造ふ様

○盤ハ底ふ川砂を三分ばかり入。其上ふ山土ハ入
よく〳〵地をならし。さて石を居るべし。但し四方正面
になるやうふ造ふ立るを佳とす。景致の按排。石樹ハ
位置ふ至てハ。造る人の好ふあるといへども。何まの系
るべきさし定めがたハあ〳〵常に山水ふ接ぶごとく徒系
よ逢ハば。よく〳〵心ふ思ひて。造る時ふ至て是を用ゆ
時ハ。自ら真ふ山水の韻を常て。絶妙の景致ハ
るべきものゝ是自然ハ人工ふ生ずる所以あり

石ハ

○清閑寺石 山城 ○紅杵石 豊后 ○播磨石 肥前 平戸
○熊野石 紀伊 ○平林石 淡路 ○鞍馬墨石 京
○加茂川石 京 ○葛城石 大和 ○黒石 伊勢
○土佐石 ○支那石 此外諸國より出る
所名石多し。但し國々の石材を交へ用ゆるも
大ふ色の揃ふ様よきべし。色のかゝりたるを
あしゝ。又對馬石。瀬戸石の類は。海石なり。苔はさがる
しゝ心はゝ用ゆ屋し

植物ハ

○檜 ○黄楊 雄黄楊なよし。葉うすく通例あしゝ。 ○雲泉皐月
○雪柳 実花咲を山柳やみるべし。然れ共舞召其面膳尾ちをよりいづるものゝ ○肥後蔦 ○戸づゝ
○定家蔓 ○松 造り木の芽生の作材樹
○枝苔 此外見合植置し

蒔石ハ

○兵庫砂礫 ○雲州あゝ島おやし

見樣ハ

○蔦蔓 石につるたる。遠山の樹杪とんぶし
○蒔石陸も。壁も。景致ふよりてえんる屋し

橋。舟。水。あゞ。試居時。小。えんそく。

盤中置物ハ

○樓。塔。亭。門。洞。鈴。人物。（人物を置べし。後人物を置べかゝず。）舟。橋

水禽。鳥。獸。をべく。樂燒を佳とす

掃除ハ

○毎年春二月頃。秋八月頃。苔。土。黑。ゴミ。

木の葉。蔦。かゝりて見苦しくなる。時。蒔石。

除く。水ふて洗ひ。日よ乾し。置。土。黑。を拭ふて去る

げんさいに山土。試入て。凹凸をならし。見上ふ蒔ふを選べ

故武禪師盆重中の餘考ふ。石。試好き。瀑

あるて。盆中ふ。石。試置。和。試布き

小樹。試植て。天然の小景。試造る。友人大江

切。先生の曰。是。漢。石。景。盆。ふ。

志。ありしよ。後。好。の人の需ふ。應して

彼。景。盆。試造る。中。凡百餘盤ふ及。て。

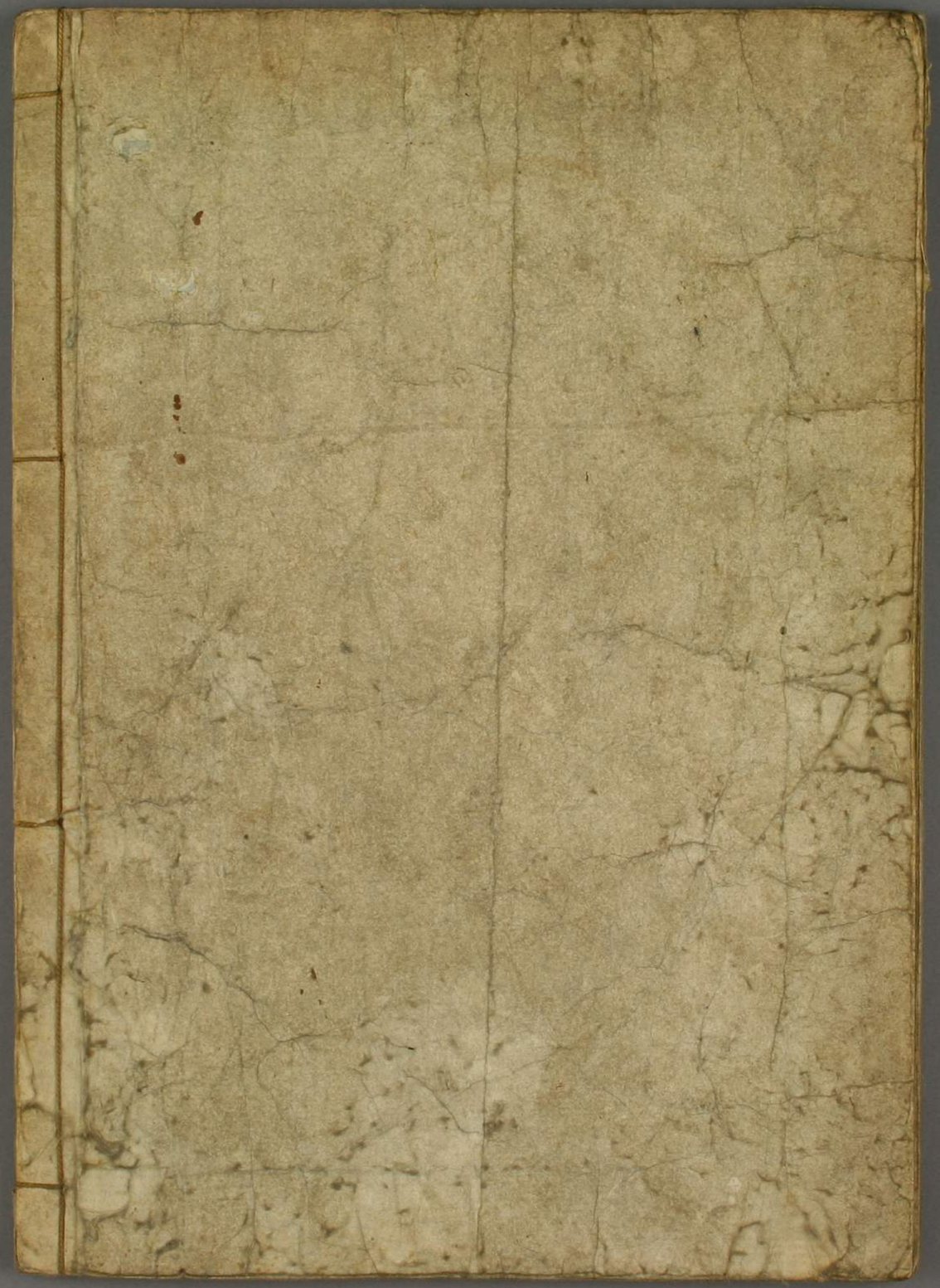
を送。風。世ふ。流行して。樂。仁。の。ふ。盆。

造。を。求。る。中。の。毛。さ。

うけれいとうしさ三十餘年の素志當し
時ゝ我頑を上本して回癖の人の素直我
和名をもかゝはいとをこうまし〳〵ふさな
めれとい侍る風流の韻ゆなれをあ風ら
まも辞せしてちの美を尾まるゆのよう我
ないはるのゝ

愛山

文政九年丙戌六月發兌

書林

京都寺町通御池上　鉛屋安兵衛
江戸通油町　鶴屋喜右衛門
大阪心齋橋通唐物町　河内屋太助
同　心齋橋通北久太良町　鹽屋忠兵衛
同　吳服町御靈筋角　玉屋市兵衛
同　江戸堀二丁目　今津屋辰三郎